

## ブックエッセイ（文芸作品）

### 躍進するインドの深い闇：現代版神隠し

佐藤桂子  
元世界銀行職員

ディーパ・アーナパーラ(翻訳：坂本あおい)、2021、『ブート・バザールの少年探偵』、早川書房 (Deepa Anappara. 2020. *Djinn Patrol on the Purple Line*. Random House)

本書は貧困と宗教紛争が子供の教育に及ぼす影響について書かれたものであり、アメリカ探偵作家クラブ賞（2021年）など複数の賞を受賞した。

長年にわたってアメリカ・イギリス、そして最近では北欧の推理小説・ミステリーを読んできた。夜寝る前の「お楽しみ」として、毎日一時間ほど読みふけている。ただ推理小説といっても私の場合は単に推理を楽しむもの、例えば密室トリックだけというものあまり好きではなく、ミステリーという体裁をとった「社会」を描くようなものが面白いと思っている。犯罪というのは社会の闇の部分を表すので、作家にとっては社会と個人のややこしい関係を描きやすいものなのかもしれない。

こんな事を考えながら海外ミステリーを読み漁っているのだが、たまには毛色が変わった欧米以外のものも読んでみようと思って手にしたのが、このインドの作品である。最近を買う前にアマゾンやその他の書評などを簡単に参考にできるので、書評も色々読んだが、この作品は2021年のアメリカ探偵作家クラブ・最優秀長編賞を受賞しているという一文が効いて読むことにしてしまった。タイトルから想起される「軽い」読み物という印象とは全く反対に、インド社会の闇、すなわち、貧富の格差、腐敗、環境汚染、司法から漏れる人々、などずっしりと重たい、ある種救いのない読後感の残る小説であった。

この話はインドのスラムに住む少年の友達が行方不明になる事から始まる。学校の先生も警察も動かない中、刑事ドラマ好きの主人公の少年がそれならと自分達で探偵団を作り友達を探しまわるが、その後も失踪事件は続き、主人公の少年と探偵団の子供達、スラムの大人達は全く理不尽な現実打ちのめされることになる。ネタバレになってしまうので小説の概要はここまでとするが、重い内容を扱っているが、少年たちのスラムでの日常生活（水のバケツを持ちながら共同トイレに並ぶ朝から始まる）や主人公と友達との他愛もないやり取り、勉強のできる女の子にやり込められ主導権を奪われる主人公などが生き生きと描かれると同時に、バザールの喧騒や屋台の食べ物の匂いなどが行間から伝わり、さすがアメリカ探偵作家クラブ賞を受賞しただけのことはある小説である。

この小説を書いたディーパ・アーナパーラは 1997 年から 2008 年までインドでジャーナリストとして、教育をテーマとした記事や特集を書いてきた人で、彼女の記事は複数の賞を受賞している。少し長くなるが、背景がよくわかるため、彼女がこの小説の後書きで記した動機を以下に紹介する。「(記事を書く過程で) 教師や政府関係者、学生や生徒達とも話し合った。自身経済的に余裕のない家庭で育ったので、機会が制限されて自分のやりたいことができないと思っていたが、最貧層の若者にはそうした限られた道さえ開かれていないことをジャーナリストとして知ることになった。・・・自分達の選んだ政府、自分達が作ってきた社会がそうした子供達を見捨ててきたことも思い知った。・・・(しかし) インタビューをした子供達は犠牲者としては映らず、みんな生意気でお茶目だった。・・・その頃貧しい家庭から子供達が消えるという事態があちこちで起きていることを知るようになる。インドでは毎日 180 人の子供が行方不明になると言われている。よっぽどの犯罪の実態が明らかになる時以外は普段はニュースにもならない。」 筆者はその後自身の状況が変わり、インドを離れることになったが、失踪した子供とその家族について書くことができなかつたことが心に引っかかっていた。ただ「貧困とインドをテーマにしたステレオタイプの記事は書きたくなかつた」とのこと。かつてインタビューした子供達のことや、その存在をあえて無視したがる社会で生き抜こうとする彼らの覚悟に思いを致した時、物語は彼らの視点から語られるべきだと気付いたと言う。「子供達のへこたれない力強さ、明るさ、偉そうな様子」を表現しようとしたという。子供を描いた物語であり、子供が主役だ。筆者は「彼らの存在を単なる統計に落とし込んでいっているという状態に物申すため、統計上の数字の向こうにいくつもの顔があることを忘れないでほしい」というメッセージを後書きで送っている。

今回このブック・レビューを書くにあたって、インドの子供の行方不明・人身売買問題を少しチェックしてみたが、2000 年代初期に英語の記事が出始めており、BBC やニューヨーク・タイムズなどに報道されている他、インドの英字新聞にもいくつも報道が出ている。国連薬物犯罪事務所 (UNODC) の **Annual Report on Human Trafficking** でも深刻な状況が報告されている。筆者が働いていたベトナムでもこうした問題があり、世界各地で起きていることを知らなかつたというわけではなかつたが、インドではここまで悲惨な状況だとは理解していなかつた。さらに驚愕したのは 2000 年代に報道され始めてから今まで殆ど記事の内容が変わっていないこと、UNODC の報告では人身取引・売買の数が増えているようにみられる点である<sup>1</sup>。さらにアメリカの司法省の報告書ではインドでの数字は信頼のおける物ではなく、小説にあるように警察は家族から届出があつても記録しない場合が多いし、家族の方も届出をすると警察や地方政府から余計な詮索をされたりすることがあるのでためらう場合があるとしているので、実際の数はこれより多いと報道されている。届出もされず、探されもしない子供達が年間に 4 万人以上もいて、20 年間もの間事情が変化していないように見えるという事は悲惨という以外に言葉を持たない。

---

<sup>1</sup> UNODC の国別データでは 2017 年ごろから 2020 年まで 3 万人前後の人身売買がインドの数として報告されている。これは失踪者数ではなく、摘発された人身売買の数だそう。2017 年以前の数字とは比較が困難なため、ここでは触れていない。

この小説はもちろん貧困問題を核としているが、それと同時にインドの問題を幾層にも描き出している。大気汚染のために主人公が通っている小学校は随時閉鎖される。閉鎖されない日でもスラムの上の空は赤みがかかった霧がかかっているようで、先が良く見えない。主人公たちはスモッグで目が痛く涙を流しながら学校に通っている。行方不明になった子供を探してもらいたいと親が近くの警察に届け出ても、賄賂を要求された上に、住んでいるスラムが不法占拠によるものなので、警官たちに反対に立ち退きを迫られたり、実際にトラクターがスラムの一部を壊し始めたりする。スラムを失うと行先のない他の住人たちは、警察を刺激しないようにしると子供の親に圧力をかけたりする。また行方不明の子供が続出するなか、疑心暗鬼にかられた住人たちが、宗教的な対立を持ち出し、流言飛語から行先もないのにスラムから出ていかざるを得なくなる家族がでたりする。主人公の母親は近くに作られた豪華マンションに住む家族の家政婦として働いているが、家政婦の仕事以外の事を押し付けられたり、要求通りに働けないとあつという間に解雇されてしまったりする。評者にとって読んでいる最中に最も重たかった問題はスラムの住民に対する地方政府と警察の無関心と無対応であった。スラムの住民たちは行方不明の子供を警察に探してもらい権利を法律上は持っているものの、実際には貧困層の権利というのは簡単に無視される。また上からの圧力があると警察の実績づくりとばかりに警官は無関係の人間を拘留したり署内で暴力を加えたり、とやりきれない思いをしながら読んでいた。

ただし調べてみると、インド政府も様々な施策をとっており、人身取引・売買に関する法律の整備、国連で採択された議定書も批准されている。また女性・児童の人身取引・売買への罰則を厳格化した他、被害に遭った女性・児童のリハビリにも手を差し伸べている。また政府内では女性・児童育成担当省（The Ministry of Women and Child Development）が被害者を救済する目的で国家計画を策定、中央委員会の設置、警察官や地方政府の役人を対象とした訓練計画の実施、ユニセフなどと協調した対応マニュアル作成、女性と女子児童を対象とした教育・職業訓練プログラム、シェルターの設置など、種々の施策をとっていると報道されている。またこの省はいくつかの NGO と共同し、売られた子供たちが働かされていた工場や農場、売春宿などを地元の警察と共に踏み込んで、不法に働かされていた子供たちを何人も救出しているという報道もされている。

しかし報道をさかのぼって見ても、こうした対策が必ずしも大きな成果を上げているようには読めないし、行方不明の子供たちの数は減っていないようである（皮肉なことにコロナの影響で 2020 年には報告された数が一時減ったようだが、これは外出できずに被害に遭う機会が減少したのと、保護者たちが報告を行う機会が減少したことの相乗効果だと UNODC は指摘している）。この問題に全く浅薄な知識しか持たない評者にとって、どのような施策が有効か論じるのは難しいが、法の厳格な執行と同時に一番重要な施策として注力しなければいけないのはやはり女性と児童に対する教育だろう。一人一人の子供達、また周りの大人が自分たちの権利を認識し自己肯定感を育むためにも、教育を受けられない、あるいは就学しても中途退学せざるを得ない層に対し、教育

の機会を与え続けること、また彼らのセイフティー・ネットとなる駆け込み寺のような居場所・シェルターを提供・運営していくこと、救助された子供達・女性たちに対する再教育・技能訓練を行う事は、迂遠でも必要不可欠な施策であると思われる。

また政府と共にいくつもの NGO が様々な取り組みをしていて、この本を書いたアーナパーラ氏もそうした NGO の存在が唯一の希望だとしている。いくつもの国際 NGO やインドの NGO が貧困層に対する教育の拡充、特に識字率が低い女性と農村部での教育・訓練、親やコミュニティーに対する啓蒙活動、さらに司法の厳格化<sup>2</sup>、ビジネス社会に対する児童労働の禁止を徹底させることを提唱し、行動していることは心強い。

インドは最近の地政学上の観点からも、人口増・経済の躍進からも世界中の注目を集めている国であるが、この本をきっかけに子供たちの失踪事件への関心が高まり、政府・NGO の施策がさらに強化され、子供達の人身売買が少しでも減るようになってほしいと切に願うばかりである。

---

<sup>2</sup> 厳格な法の執行はもちろんこの問題に対する最優先の課題であるが、UNODC のデータを見ると人身売買の罪に問われている人数は大変少なく、問題の大きさに対して十分な執行がなされていないようである。またインドは近隣諸国からの人身売買の経由地・取引の場になっているらしく、問題をさらに複雑にしている。